



宮崎に寄せて 「一夜の友人」

あれはぼくが大学の四年生のときだったと思います。留年して大学には6年いたのです。その頃の記憶が不確かです。宮崎から春休みで三原に帰省するために夜行に乗りました。その汽車は鹿児島発でしたのでもうかなりの人が乗っていました。ぼくは一番端っこのボックスの席に座りました。高鍋駅だったろうか数人の若者たちが組立式自転車の入った袋を担いで入ってきました。車内の通路はそのためふさがってしまいました。彼らはデッキのほうにそれらを再び運び出しました。汽車はずんずん進んでいきました。やがて彼らは戻ってくると空いている席に腰掛けました。しかし彼らのうち一人は離れたところに座らなくてはなりません。それは女性でぼくが座っていた席の真向かいにすわりました。するとやはりぼくの前に座っていたぼくと同じようなジーンズをはいた青年が女性に席をかわってあげようと立ち上がり、彼女を仲間とは通路を隔てただけの席に座らせてやりました。そして彼はぼくの真向かいに座り週刊誌を読みはじめました。なんだか汽車の旅に疲れてしまっていたようでしきりに頭を抱えていました。それでも周りの人たちに対する親切な気の配りようは相変わらずで、私に足を伸ばせるようなスペースを作ってくれたりしました。

どちらから話しかけたのかは忘れたけど、彼との会話、それからひしひしと感じられる彼の親切さは、ぼくに人であることの喜びを覚えさせてくれました。彼の優しい性質はぼくの心を温め、また力づけてくれました。中央大学の工学部に在籍していて一年間留年するというので、そこはぼくと同じでした。彼とぼくは同じ年だったに違いありません。彼は長い春休みを利用して沖縄の島々に行き、いろんな人たちに会ってきたことを生き生きと語ってくれました。浜では何人もがのんびりとテントで暮らしていたそうです。

彼は真の友を求めて旅をしていたに違いありませんでした。ぼくは彼のような人が世の中に少ないのを静かに考え思いました。彼は若いがなんだかもう老成しているようなところがある、しかし年をとるにつれて真の若さに近づくのだろうと。翌朝早く、汽車が門司に着くと彼といっしょに降りて、プラットフォームで別れました。

あれからもう40年余りが過ぎるが、彼のような人に再び会えたのはあと一回だけです。こちらも一夜限りの一期一会でした。尊敬できる男女にはいろいろ巡り会うことがあったが、これら二人は別格として記憶されているのです。自分を鏡で見ているようなことだったからだろうかと思ったりします。

